

- ◇村崎一等兵の語り伝えるもの (3月13日第4回例会報告1)
- ◇「宗教的な心構え」の追求が目指したもの (3月13日第4回例会報告2)
- ◇第四部「伝承の章」の報告を終えて (飯島聡)
- ◇出典の明示について (伊藤龍哉)
- ◇講座第二期がスタート!

村崎一等兵の語り伝えるもの——飯島聡さんの検証が見出した「伝承」の精神

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第4回は、2019年3月13日に開催されました。参加者は16名。「第四部 伝承の章」を対象に、HOWS 受講生の飯島聡さんが報告しました。また、アドバイザーの立野正裕さんが、大西巨人における彼岸的なものへの関心について問題提起を行いました。

飯島さんの報告題目は、「村崎一等兵の階級意識——村崎一等兵による東堂二等兵への「長話」をめぐる」。召集された兵に支給される金銭の少なさを具体的な数字を挙げて語り、軍隊が階級社会の縮図であることを解き明かしていく村崎の「牛の涎のごたあるおしゃべり」は、聞き手である東堂の姿を消去した形で提示されています。形式的に特異であり、「軍人が賃労働者でもあること」など『『神聖喜劇』の核心的なモチーフが明かされる最も重要な箇所の一つ』（鎌田哲哉「後記」〔『未完結の問い』所収〕）である部分に的を絞り、飯島さんは考察を展開しました。

報告では、零細農家出身の鍛冶職人である村崎の人物像がまず整理され、経験を通じて知性を磨いてきた彼がなぜ話の聞き手に東堂太郎を選んだかが問われました。納得できないことに服さない言動に接した村崎が東堂を共感的に評価していたのではないかと、というのが飯島さんの推察です。しかし、村崎が見込んだ「育ちのええ」東堂には、兵の置かれた状況についての認識がまだ十分ではありません。衣食住が保証され、給与が支払われる軍隊は、平等の社会であり、貧困層出身者にとってははずばらしい世界であるという「学校出上等兵」の主張は、詐術的なものですが、賃金格差の計算方法など、東堂も無意識に踏襲しているところがありました。村崎の体感的な話は、軍隊が高等教育を受けた者が優遇される縦型の組織であることをよく伝え、東堂に残存していた観念性を取り払っていきます。

「百姓兵隊」にしばしば見られる「真っ正直な働き者」と対照させながら、村崎は「学校出上等兵」に代表される、立身出世や自己保身に努める中流階級層を批判していきます。他聞を憚られる、危険とも言える長話を村崎はなぜしたのか。飯島さんは、次世代への語り継ぎ、すなわち章題に採られた「伝承」を目指したからではないかと、という見方を示しました。村崎の長い語りを東堂が聞き、説得されることで、二人の間にはある種の連帯意識が形成されます。彼らのつながりは、軍隊の民主化、ヴォー・エン・ザップが『人民の戦争・人民の軍隊』で記した「全兵員間における政治的平等の関係」の実現につながるものではないかという見通しを付け加えて、飯島さんは報告を締めくくりました。

飯島さんからは、当日の報告をていねいにたどり直し、新たに気づかれたことにも触れた一文を寄せていただきました。村崎一等兵の言葉を重く、かつ深く受け止めた感想をぜひご一読ください。

「宗教的な心構え」の追求が目指したもの——立野正裕さんの問題提起の重要性

続いて講座のアドバイザーの立野正裕さんが、問題提起を行いました。大西巨人文芸に関して十分に論じられていない、クリティカルな問題として、従来宗教が扱ってきた彼岸的なものへの関心があることに、立野さんは留意を促しました。

ジョージ・オーウェル「アーサーケストラー批判」の一節「来世の不存在を承認しつつ、なおいかにして宗教的な心構えを復興するか、が真の問題だ。」を、大西巨人は、自作でくりかえし取り上げました。マルクス主義者でありつつ、現世を越えた価値を模索するのはどういうことなのか、立野さんは考え続け、さまざまな文学者の発言に手がかりを探してきたそうです。大西の模索は、例えばフローベールが書簡で「神々はもはやなく、キリストはまだ出現せず、その間数百年キケロからマルクス・アウレリウスまでの時代、古代ローマ人はたった一人、虚無の中で雄々しく立っていた」と記したことに関連するのではないかと。人間が自身の生の無意味さに気づき、なおかつ虚無の深淵に臨んで耐えることができた時代があったことをフローベールが直観したことに通じる意識が、巨人にも初期から認められる。「新しい文学的人間像」(1947年)以来追求されてきたのは、「religio」(「宗教」を意味するラテン語)が含み持つ「慎み」のような心構えを日常的に確立することであった、と立野さんは推察しました。無神論的にして宗教的な精神という一見矛盾する目標が、本来人間が備えていた本質の回復にあることを看取った指摘は、『神聖喜劇』の東堂太郎の思想を理解する上でも重要な参照点となるものと思われます。

飯島さん、立野さん、お二人の話を受けての意見交換は、広がりのあるものとなりました。「鞆丸問答」で話題となった「命令」・「規則」をどのように考えるべきか、飯島さんの報告における「階級意識」とはどのように規定されているか、村崎の意識は東堂にだけでなく、大前田にも開かれているのではないかと、倫理的な意識と宗教的な心情とはどのように異なるのか、などの質問が出され、それぞれの解釈も披露されました。村崎の話の前に、東堂が第二インターナショナルシュツットガルト大会の決議を思い出し、アドルフ・ヨッフエの遺書の文言に連想を及ぼしていることからすれば、連帯意識の形成と宗教的感情の模索という、相異なって見える問題もつながるのではないかと、という趣旨の発言もありました。懇親会にも引き継がれた話し合いは、複数の発表がもたらした「楯円」の成果と言えそうです。

「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第四部「伝承の章」の報告を終えて

飯島聡 (HOWS 受講生)

わたしは『神聖喜劇』第四部のうち「第三 縮図」と題された、光文社文庫版で三七七頁から四六四頁の、分量としてはおよそ八〇頁に相当する箇所を絞って報告した。すなわち、村崎宗平一等兵が一世代下にあたる主人公東堂太郎二等兵に自らの“階級意識”に裏打ちされたものの見方を伝授する「長話」の場面のみを取り扱った。

その第四部は「伝承の章」と銘打たれている。「伝承」という言葉の「古くからの制度・風習・信仰・言伝え(などを、受け継ぎ伝えていくこと)」(『新明解国語辞典』)という意味にもっともふさわしい箇所が、村崎の「長話」にあたると思われる。著者・大西巨人はここで村崎の発言にのみを採録して、聞き手の東堂の発言は削っている。村崎と東堂との対話という形式をあえて捨てて村崎の台詞だけを抽出する手法は、怒涛の博多弁(?)を読者に浴びせつける村崎の一種の“独白”となって読者に強烈な印象を与えるとともに、村崎の階級意識生々しい言葉づかいを体感させ、読者の階級意識をも活性化させるのではないかと。「伝承」行為のひとつのあり方を提示していると、わたしは思う。

また、本報告はタイトルを「村崎一等兵の階級意識」としておこなった(もともと、当講座のアドバイザーである山口直孝さんが命名されたものだが)。そのことに絡んで、当日の討論の場では、「階級意識」という言葉をわたしが頻繁に用いていることに対する疑義がだされた。報告者としては、「階級意識」の定義を「自己の属する階級と他の階級との差異に関する捉え方やそれに対して抱く心情」(『新明

解国語辞典』)にまで押し拡げることで、大西が村崎に仮託して読者に訴えたかった、「軍隊は社会の縮図である」という、ものの見方やそれを支える心情をよりの確に説明できるのではないかと考えて使用した(結果、成功しているかどうかはわからないが)。また、「貧乏百姓の俸で貧乏鍛冶屋の万年一等兵」という、ある種の意地・矜持をもって自認する村崎の内面世界を理解するために、「階級意識」以上に適当な語彙がわたしには見いだせなかった。

さて、村崎の「長話」は、前半は軍人の給与計算の話、後半は軍隊生活のなかで見出される様々な人間類型とその言動の話で構成されている。

前半では、村崎は、軍人を「給料取り」として見ることで、「地方」とそう変わらない、軍隊内を貫く階級性を露呈させてみせる。すなわち、一方で「ほやほやの新兵二等兵」の東堂と「既教育召集の万年一等兵」の村崎とが給料では「毎月五円五十銭」と「給料の高」ではまったく同じ“階級”に属することを明らかにし、他方で給料面で「准尉、少尉が二等兵・一等兵の十四倍、中尉が十七倍、大佐が七十七倍、大將が百二十六倍」になるという、身も蓋もない現実を東堂に突きつける。

後半では、「おれ〔村崎——引用者〕より一年古年次の既教育召集上等兵」である「学校出上等兵」が吹聴する「御託宣」、すなわち「軍隊は一般社会である『地方』よりも暮らしやすく、軍隊内では実力本位の『機会均等』が一般社会よりも徹底している、貧乏人にとっては過ごしやすい組織だ」という主張が、現実を見ない“世間知らず”な観念の産物に過ぎないものと村崎は喝破する。たとえば、先述の給与の話に絡めて言うと、「地方」での学歴・家柄・身分・地位が「地方」同様に軍隊内のなかでもれっきとして物を言う風潮が、兵隊の給料の差として歴然と現れているのである。「どうや、地方とおなじのごたあることじゃろうが? 地方の官庁、会社なんか、よう似とるじゃろうが?」と迫る村崎の的確な追及は、「地方」での階級が軍隊での階級におおよそ対応・反映しているのであり、軍隊もまた一般社会の「縮図」であることを説得力をもって教えてくれる。

さらに、村崎の階級意識に裏打ちされた鋭い人間観察眼にもわたしは舌を巻く。すなわち、先述の「学校出上等兵」タイプのほか、神山豊上等兵に象徴される苦学立身型の「高級サラリーマン」閣下タイプや、「軍隊が生活になつとる職業軍人、陸士出とか下士候あがり」の村上少尉殿タイプ、そして「『忠君愛国』てろ『滅私奉公』てろ七面倒なことにゃあんまり関係のないごたある模様で、軍隊事に一所懸命精を出し」、「地方におるときにも、軍隊でとおなじごと陰日向のない真っ正直な働き者じゃるとにちがうめえ」兵隊だと村崎が高評価を下すタイプなどの人物類型を分類・検証してみせる。これは軍隊内でもぐめく人間模様が一般社会とそう変わらないことを暗示しているのではないか。

ところで、村崎の「長話」の直前に配置されている、第二インタナショナルの一九〇七年シュツットガルト大会の「決議」を東堂が思い出す場面が、村崎の「長話」の伏線になっているのではないかと、後日わたしは考えるようになった。すなわち、東堂が、この決議の「ブルジョア国家機構の要素を成すとはいえ、近代の軍隊は、……」という文言が、『軍隊内務書』の「綱領十一」の冒頭「兵営生活ハ軍隊成立ノ要素ト戦時ノ要求トニ基キタル特殊ノ境涯ナリト雖(イエド)モ」という文言と文脈上類似していることに気がつくのだが、その場面がなぜ挿入されているのか、という問題である(ただ、わたしは、「決議」の文言にある「全人民層の軍隊化傾向」や「大衆的軍国化」などの言葉の意味するところを、テキストの文脈に即して十分に理解するまでには至っていないが)。

その解明の手がかりとして、当日の報告でわたしが紹介した、ベトナム人民軍を率いたヴォー・グエン・ザップのゲリラ戦論『人民の戦争・人民の軍隊』が参考となるのではないか。そこでは、軍隊内における「三大民主主義」、すなわち政治・軍事・経済の三方面での民主主義が掲げられている(中公文庫版で一一二頁から一一三頁)。「あらゆる種類の搾取階級の軍隊とは逆に、……」という文言から始まるザップの理想とする軍隊像は、ブルジョア社会の「縮図」としての近代の軍隊像に見慣れてしまっているわたしたちに、そのアンチテーゼとして鮮烈な印象を与えてくれる。きっと、東堂や村崎そして著者・

大西自身が最終的に理想とする組織（運営）のあり方も、ザップによる軍隊内での民主主義の実践と近似したものになるのではないか。理想の組織や社会とは何か？ そのような問題意識をもって第五部以降の展開も引き続き追っていきたい。

出典の明示について——講座参加者との対話から

伊藤龍哉

昨年12月にはじまった、HOWS 講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」は、これまでに4回を数え、光文社文庫版で全五巻からなる大長編小説の、ちょうど第二巻まで読み進めたことになる。そのなかで学んだことを、とくにひとつ挙げて、ここに記す。

わたしは講座第1回目（12月5日）の報告を担当した。報告を終えて間もなく、ひとりの参加者——S氏とする——から一通の書簡を受けとった。そこには、当日わたしの配布したレジメの不備不正確が指摘されていた。それは次のとおりである。

「レジメでは、森有正『遙かなノートル・ダム』が引用されていますが、私の持つ森有正の『遙かなノートル・ダム』は「だ、である」体（常体）ですが、当該引用文は「です、ます」体（敬体）です。『遙かなノートル・ダム』から引用文を探すことができませんでした。出典をご教示ください」。

これはレジメの不備不正確である。わたしは講談社文芸文庫『遙かなノートル・ダム』に収録される「ルオーについて」から引用をした。だがレジメには、「講談社文芸文庫」の表記も「ルオーについて」の表記も脱落している。それは、——森有正著、講談社文芸文庫『遙かなノートル・ダム』所収「ルオーについて」——と書かれるべきものであった。わたしは、わたしの誤りを、この場を借りて訂正しお詫びする。

しかしこのエピソードをとくに取りあげて銘記しようとするのには、先ほど引用したS氏の指摘にはつづきがあり、その部分は『神聖喜劇』を読むうえで疎かにできない問題を提出していると思うからである。ふたたびS氏の書簡から引く。

「報告は、他者の検証と信頼（団結といってもよい。）を伴うことで内容が深まるので、出典の明示が不可欠です」。

出典の明示が、他者との信頼と団結に関わること。……そのとき手紙に目をやるわたしの顔面はみるみる紅潮したことと思う。「論語読みの論語知らず」という俚諺が、その場にふさわしく思い合わされた。思わず息を詰めた。出典の表記の不正確が、単純な「見落とし」の類にとどまらず、そのような「見落とし」は、わたしの意識の底に潜むある種の「傲慢さ」に由来するのではないか、と危惧したからである。

『神聖喜劇』第三部 運命の章、第三「匹夫モ志ヲ奪フ可カラズ」には、被差別部落成立の「起源」をめぐる東堂が思索を押し拡げる場面がある。橋本が自ら「隠坊」の名告(なの)りをあげたことを契機に、「穢多」と「隠坊」との関係、東堂らしく、多数の文献を記憶の棚から引き出しながら考察してゆく。

そのひとつに、伴(ばん)蒿蹊(こうけい)著『閑田耕筆』(享和元年〔一八〇一年〕初版)がある。また別のひとつに、鈴木忠候集撰『一挙博覧』(文化四年〔一八〇七年〕初版)がある。いずれの書にも「さひの里」という名称と葬送の行われる地名(下(しも)佐(さ)比(ひの)里(さと)、上佐比里、佐比寺)をめぐる関連の、ほとんど同一の記述がみられる。けれども「後者は『尾州天野氏の説なり。』と出所を明記しているのに、前者は『と或人のいへるはさもあるべし。』とぼかしている」との違いに東堂は注意する。

尾州天野氏とは、江戸中期の国学者天野(あまの)信景(さだかげ)のことである。日(ひ)尾(お)荆山(けいざん)は『燕居雑話』(天保八年〔一八三七年〕初版?)のなかで、「さばかりの人(天野信景——註伊藤)を、蒿蹊が唯ある人とのみ云ひて、名をばなどで省きけむ」と蒿蹊を非難している。

以上は、この場面における東堂の思考の流れであり、東堂が出典の明示を問題にしていることがわかる。なぜか。

わたしの思うに、それは、文献によって歴史と接続してゆく東堂の方法にとって、肝心の文献の不正確ないし曖昧さは、歴史と断絶する危険を帯びているからではないか。同時に、歴史的存在である自己および他者を喪失する危険をも孕んでいるからではないか。それは、ここでは橋本との、信頼と団結の基礎に関わる問題であろう。

蒿蹊の「と或人のいへるはさもあるべし」風の「文学的」表現は排されねばなるまい。わたしの「誤記」に潜むひとりよがりの「傲慢さ」は改められねばなるまい。おそらくこの二つは同質の危険を示している。それは信頼と団結と連帯を阻害するものである。

「出典の明示が不可欠です」という S 氏の記述は、『神聖喜劇』の根本の精神から発せられた批判として、わたしに読まれるべきである。

講座第二期がスタート！ ——連帯形成の思想と手続きとに学ぼう

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」は、5月29日（水）から第二期になります。今期は全3回、第3巻から第4巻前半までを読み進めていきます。2月22日の休日の兵営に、何か異変が起きた気配が漂います。何も知らされない状況の中、東堂たち「食卓末席組」の教育兵たちは、話し合いを重ねながら事態を見きわめ、対応を考えていきます。民主的な協議によって、偏見を脱していく兵士の営み、また、大規模な回想を行い、虚無主義からの脱出の契機を探る東堂の思索からは、連帯形成のあるべき姿がうかがえます。作品を楽しみつつ、彼らの言動を顕彰することで実践的な知を得られればと思います。講座に積極的にご参加ください。

第二期プログラム

第1回 5月29日（水）18時45分～21時15分

「第五部 雑草の章」——「道義および公正」の模索

報告＝杉山雄大（HOWS 受講生）

第2回 6月29日（土）13時00分～16時30分

「第六部 迷宮の章」——「芸術家」であろうとする心構え

報告＝渥美博（HOWS 受講生）

第3回 9月21日（土）13時00分～16時30分

「第七部 連環の章」（第一～第四）

報告＝山本恵美子（HOWS 受講生）